

「防災井戸端教室の開催」

鈴鹿市生活安全部防災安全課

1 はじめに

鈴鹿市は、三重県の中北部に位置し、東は伊勢湾に面し、西は鈴鹿山脈で滋賀県に接しています。地形は、市の西部を南北に鈴鹿山脈が走り、その山麓から海岸にかけては扇状地や沖積平野からなる平坦な土地が広がっています。気候は、年に数回の積雪や台風の接近などはあるものの、年平均気温が16.9℃、年間降雨量は1,600mm程度と恵まれています。

このように広い平坦地を有し、比較的気候にも恵まれた本市では、古くから自動車産業など数多くの企業が立地し、伊勢湾岸地域有数の内陸工業都市になっています。また、市内のレーシングサーキットにおいては、国際的な興行のひとつ「フォーミュラーワン・日本グランプリ」が開催されることなどから、国内外からの観光客が多いのも特徴です。

2 「防災井戸端教室」について

鈴鹿市では、平成15年度より「防災井戸端教室」を開催しています。「防災井戸端教室」とは、市内の全小学校（30校）に設置してある防災井戸を囲んで行う防災研修会の総称です。

本市においては、昭和19年の東南海地震以降、本年までの66年にわたって、建築物等に被害が出るような地震の経験はありません。したがって、水道、電気、ガス等のライフラインが各戸に整備されてからは、それらが同時に長期間使用できなくなるという大規模地震災害の経験がないということになります。

このことは、市内の高齢者を除く多くの市民には、幸いにも地震経験がないということでもあります。一方、一方で本市は近く発生が予想される東南海地震の防災推進地区として指定を受けており、東海地震・東南海地震の発生時には、大混乱を招くのではないかと懸念がくすぶっています。

「蛇口をひねれば水が出る」、「スイッチを押せば電気がつく」、災害時には、この当たり前が、当たり前でなくなるということを、どうしたら伝えられるか。このことが、防災啓発を進める上での課題になってきました。

そこで、私たち防災担当が、市民の防災意識高揚のためのキッカケとして選んだのは「防災井戸」の活用でした。市街化が進むにつれて、市内に多くあった井戸はその数が減少し、近年では「井戸を見たことがない」、「井戸から水を汲んだことが



防災井戸

ない」という子どもが増えてきました。そこで、井戸を囲んで防災について考えてみることにしたのです。対象は、防災井戸が設置されている小学校や幼稚園の子どもたちと先生です。

国（文部科学省）の地震調査研究推進本部が発表している東海地震、東南海地震の地震発生確率（海溝型地震の長期評価）からすると、今、小学校や幼稚園に通う子どもたちが、大人になる（親になる）頃までに被災する可能性が高いと考えられ、幼少期からの防災啓発は欠かせません。また、子どもたちに防災を啓発することで、子どもを通して、同時にその親や祖父母等へ防災意識が波及することに、私たちは期待しました。

家具の転倒防止対策もそのひとつです。「今日やらなくても明日やればいい」、「明日できなかつたら今度すればいい」、しかし、それでは手遅れになるかもしれません。「今、実践する」それには子どもと親、祖父母等を一体として防災啓発をすることが欠かせません。

「お父さんは大きな地震の後、すぐに仕事から

帰ってくるができるだろうか？待ち合わせ場所は？」「おじいちゃんの寝室の本棚は倒れてこないかな？」そんな小さな疑問を投げかける場所、それが防災井戸端なのです。

井戸端会議ですから話が弾みます。そして何より、子どもたちのあまり見たことがない井戸を見たときの大きな瞳が印象的です。興味は、井戸から防災の話へと自然に流れ吸い込まれていきます。先生たちにとっても、これまでは、学校にあることは知っていても、あまり触ったことがない防災井戸です。それが防災井戸端に参加することで「いざ災害が起きたら私たちは何をしたらいいのだろうか」、「せっかく井戸があるなら授業でも使ってみよう」と考えるようになり、今まで校舎の片隅で眠っていた井戸から防災への疑問や関心がどんどん汲みだされます。そして、いつの間にか、そこに小さな防災の芽が育っていくのです。

3 おわりに

現在、「防災井戸端教室」の中では、実際に井



防災講義を受けている小学生



戸を囲んでの防災教室の他に、卵の殻を飛散したガラスに見たて、ガラスの飛散防止の必要性や素足で逃げることへの危険性を肌で感じてもらう等、様々な内容で年間100回程度の防災講習会を行っています。

このようにして使用頻度が増えた井戸は、水脈が変わることもなく、質、量ともに豊かになり、子どもと先生、そして私たちにとっても、決して

枯渇することのない防災啓発の源になってきました。

鈴鹿の防災井戸に触れて育った子どもたちが、近い将来発生が予想される東海地震、東南海地震といった巨大地震を乗り越え、次の世代へと防災の輪を紡いでいく未来有望の防災の源となると期待せずにはられません。



職員の説明を受ける父兄と小学生



素足で歩くことの危険性の体験